

図書館業務用電子計算機システムの更新

情報管理課 システム管理掛

昭和61（1986）年に図書館業務用電子計算機システムを導入し、以来、図書館業務の電算化の適応業務拡大を図ってきました。本年1月には、第5期目にあたるシステムの調達を行い、業務用システムは富士通（株）製iLiswave、電子図書館システムは富士通（株）製iLisSurfを導入することとなりました。

前回（平成10年1月）のシステム更新は、それまでの、中型汎用機によるホスト集中型システム構成から、クライアント・サーバ方式のオープンシステム化への転換と電子図書館システムの新規導入という大きな更新となりましたが、今回は前システムのコンセプトを引き継いだ更新となっています。

導入されたシステムのハードウェアは、前システムと比べて、約1.5倍の性能・機能をもち、サーバはUNIXサーバ群を中心とし、クライアントシステムはWindows2000ProfessionalをOSとする業務用パソコン240台が、附属図書館の他50ヶ所の図書（館）室に配置され、KUINSを介してネットワーク接続されています。今回の更新にあたっては、前回システムのコンセプトを引き継ぎながらも、（1）多言語対応システム（2）ネットワークセキュリティの強化について特に留意したものとなっています。

（1）多言語対応システムは、国立情報学研究所（NII）の目録所在情報サービス（NACSIS-CAT）で提供される中国語と韓国・朝鮮語の所蔵情報に対応しています。

このことにより、OPACにおいては、エンド・ユーザのパソコンに中国語（繁体字、簡体字）や韓国・朝鮮語のUCSフォントがインストールされており、使用するインターネットブラウザが、これら

のUCSフォントの表示が可能であれば、これらの文字が表示可能となっています。

エンド・ユーザのパソコンが、これらの条件を満たしていない場合は、中国語と韓国・朝鮮語は、◆のキャラクタで表示されます。また、当分の間、多言語対応OPACと従来のOPACを検索画面で切り替え可能にし、併用して提供しています。詳しい内容については、OPACのページで紹介いたしております。

（2）インターネット環境の整備、成熟とともに、一方では、セキュリティに充分配慮したシステムを構築することが、サーバ管理・運用者に強く求められています。図書館システムも現在対応すべき、セキュリティに配慮したシステムを構成しています。

業務システムにおける新機能については、業務担当者向け説明会を開催し解説を行っていますが、利用者サービスにおける新機能については、その運用開始とともに、サービス毎に、附属図書館ホームページなどで紹介させていただきます。